

**前期：キリスト教と近代的知——宗教哲学構想**

オリエンテーション——「キリスト教と近代社会の諸問題」

## 1. 前年度のまとめ——象徴論・言語論

1-1：人間存在と象徴・言語——象徴を操る動物としての人間

1-2：言語と実在・真理

1-3：人間的現実の構成——隠喩・モデル

## 2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想

2-1：近代の知的状況における宗教思想 5/13

2-2：批判哲学から批判的実在論へ 5/20

2-3：シュライアマハーの宗教哲学

1：シュライアマハーと宗教哲学の基本問題 5/27

2：シュラエルマハーの言語論の射程 6/3

2-4：ティリッヒの宗教哲学

1：ティリッヒの象徴論 6/10

2：ティリッヒの神話論——シェリング、カッシーラー 6/17

2-5：波多野精一の宗教哲学

1：波多野宗教哲学と実在論 6/24

2：波多野宗教哲学の方法論、そして象徴論 7/1

2-6：リクールとヒック 7/8

2-7：言語論と宗教哲学 7/15

2-8：次元論と宗教哲学 7/22

**後期：キリスト教と社会理論——経済と環境**

## &lt;前回&gt; 隠喩・モデル

(0) 聖書からの具体例（ヨハネ 6:22～59）

(1) 言語の諸レベルと隠喩の位置

3. 語—文—テキスト→ 語の記号論/ 文の意味論/ テキストの解釈学（リクール）

隠喩は文のレベルの言語現象である。テキストのレベルへ議論を拡張する。

4. 循環構造：「経験—隠喩的象徴的言語（物語）—概念（体系・形而上学）」

(2) 旧修辞学から新しい隠喩論へ1) 伝統的隠喩論とその問題性

(1) 隠喩は比喩、すなわち命名に関わる。

(2) 隠喩は言葉の字義的意味からの逸脱による命名の延長である。

(3) 隠喩のこの逸脱の理由は類似である。

(4) 類似の機能は同じ場所で使用可能であるような言葉の字義的意味から借用された言葉の比喩的意味を代用することを根拠付けることである。

(5) 代用された意味はいかなる意味論的な革新も含まない、それゆえ、我々は、代用された比喩的意味に対する字義的言葉を回復することによって、隠喩を翻訳することができる。→ 経験への接続の問題（循環構造）

(6) 隠喩は革新を認めないのであるから、それは単なる言述の装飾にすぎない。したがって、言述の情動的機能として範疇化することができる。

↓

新しい隠喩論：隠喩を言葉のレベルにおける意味の逸脱としてではなく、文のレベルにおいて可能になる隠喩表現をめぐる複数の解釈の葛藤（相互作用）から可能になる新

しい意味論的な革新の問題として捉える試みである。

7. レイコフ：伝統的な隠喩論の誤謬＝「日常言語は字義的であり、隠喩的でない」

## 2) 新しい隠喩論の試み

「隠喩は詩人だけのものではない。それは日常言語に内在し、生、死、時といった抽象概念を把握するための主要な方法なのである」（レイコフ、1994、62）。とくに科学言語における隠喩論が示すように、隠喩は科学における発見の論理に属している。「場」「波」のイメージ

8. 「源泉領域から目標領域への写像」

10. 隠喩はそれを使用することによって目標領域のそれまで十分に認知されていなかった構造が顕わにするという機能を有するのであり、それは隠喩の発見的機能に関わる問題である。（Richards: tenor-vehicle、Black: focus-frame、Beardsley: the metaphorical twist）

新しい意味の生成を帰結する、つまり焦点となった事柄の新しい意味理解を可能にする、これが隠喩表現の核心点なのである。したがって、隠喩とは新しいものの見方の発見。新しい写像の生成。→ 経験の再編（経験の生成）、現実意識の再構築。

## (3) 隠喩の指示の二重性と実在の開示

14. 隠喩の指示(Referance/Bedeutung)。隠喩的表現と特徴づけられた宗教言語が、指示を持ちうるのか、あるいはその指示対象とはいかなる実在性を有するのか、という問いは、神学的実在論の最重要問題に他ならない。たとえば、イエスの「神の国の譬え」。

言語の指示とは、記号体系外部とその記号との関係。つまり、指示において問題となるのは、記号が自己完結的な存在ではなく、その外部を有すること。

↓

言語の外部とは何か。言語の世界、心の世界、実在世界、そしてそれらの彼方。

15. 宗教言語、とくにその隠喩的表現とは？

- ・指示対象がいわば存在しない、あるいはその存在は重要ではない、という主張。  
構造主義、あるいは詩的機能＝自己指示性（ヤコブソン）  
ブルトマンの非神話論化：実在への指示から実存的決断の呼びかけへ  
神話・世界観 信仰・主体性

16. 隠喩における指示の二重性（リクール）：意味の生成は、指示の二重化をもたらす。  
隠喩・対象についての複数の解釈の相互作用

→ 日常言語におけるような日常的経験的実在への指示機能は中断される（＝第一度の指示の中断）。意味の隠喩的歪み・よじれ：その意味に基づいて生じる指示対象の確定を不可能にする。

→ 第一度の指示の中断を条件とした第二度の指示作用の発生。

詩・芸術、理念、そして宗教的実在 → これら三者の違いは？

宗教の究極性（究極的関心）

人格の全体性＋極限

17. 第二度の指示の指示対象：実在の日常的イメージの模倣ではなく、実在の新しい解釈  
・見方の開示であり、前方へと投影され再構成された実在。

「神の国」の現実性とは。

譬えは日常的な経験世界の事物を素材とした物語であるが、それが神の国の現実を指示するためには一端日常的な指示が中断されねばならない。その上で神の国の現実がテキストの前方に開示される必要がある。

↓

人間的現実の構成。人間的現実は奥行き・深みを有している。理念・美・そして宗教。

S. Ashina

Terry Eagleton, *Reason, Faith and Revolution. Reflections on the God Debate*, Yale University Press, 2009. (『宗教とは何か』青土社、2010年。)

・特殊性から普遍性へ

19. 人間の日常性自体が隠喩的構造を有するとすれば、虚構と現実の二分法も廃棄されねばならなくなる。では、真理の基準とは何か。歴史に対する文学の優位（アリストテレス）。→小坂井敏晶『神話という虚構』東京大学出版会、2002年。

### <まとめ>

- ・隠喩（レトリック）は、認知の問題である。自己と世界（との相関性）、超越的なもの。
- ・隠喩は、発見に関わる。新しい隠喩の試みとその成功と失敗。  
言語共同体とそこにおける受容。
- ・隠喩の意味と指示。文のレベルでの意味の緊張 → 第一度の指示の中断と第二度の指示の生成（世界の開示）  
隠喩の最初の発見・類似の発見 → 隠喩表現の伝達・類似の発見 → 隠喩の受容
- ・隠喩（類似関係）—換喩（metonymy、現実世界での隣接関係、空間と時間）  
—提喩（synecdoche、意味世界での包含関係、類と種）

↓

これから、人間の基本的な認知構造に関わっているが、特定の宗教を特徴付ける特定の認知構造は存在するか？

ヘブライズムとヘレニズムは、換喩と隠喩の対比と重なるか。ハンデルマン。

- ・宗教的現実・実在（神の国）とはいかなるものか。

言葉の出来事（Sprachereignis, Wortgeschehen）→正典・靈感とは何か。動的靈感説。

## 2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想

### 2-1: 近代の知的状況における宗教思想

#### (1) 「近代」を論じる際の留意事項

1. いつから近代か、また近代はどのような段階を経て展開してきたか。

古代/中世/近代といった時代区分は便利であるが、それ自体がルネサンス期の産物、決して問題がないわけではない。

宗教（キリスト教）との関連から見て、近代・モダンに、17世紀中葉以前と以降での段階を設定し、また、19世紀の末以前と以降とを区分する。

2. 多様性あるいは多元性→時差・ずれ

モダンは、地域によって（17世紀中葉から18世紀にかけてイギリスで典型的に成立し、後にグローバル化によって世界規模で進展しつつある社会システム）、また社会システムのどのサブシステム（科学・啓蒙的な実証主義的科学/資本主義・市場経済/民主主義・議会制、立憲制、信教の自由と政教分離）に注目するかで、その理解は異なってくる（進展の速度あるいは普遍化の条件の相違）。モダンとは伝統的・封建的な社会システムのシステム変動によって生成した社会システムの全体性。

#### (2) 世俗化とキリスト教的伝統的知の変動

3. パネンベルク『ドイツにおける新しい福音主義神学の問題史』（Pannenberg, 1997）:

19世紀のドイツ・プロテスタント神学の問題状況を規定するものとして宗教改革後の宗教戦争の帰結、つまり教派的多元性の状況に注目している。

宗教改革後の宗教戦争は、キリスト教的統一世界（Corpus Christianum）の分裂の固

定化、つまり教派的多元性の状況を帰結したが、それは市民社会の統合がもはや宗教的統一性によっては確保できないことを意味した。むしろ、市民社会の安定化のためには、その不安定要因である教派的対立の激化を克服しなければならなかったのであり、ここに成立したのが、宗教的寛容論（信教の自由）と政教分離システムだったのである。その結果、宗教は私的領域に位置づけられ(Privatisierung der Religion)——公的領域に教派的対立をもちこまない——、市民社会の統合原理は、宗教と教会から、人間性と国家（絶対主義と国民国家）へと移行し（＝世俗化）、知的世界の中心も神学から哲学へと移ることになる。トレルチが、啓蒙主義と人文主義的新プロテスタンティズムとして論じた状況の成立である。なお、パネンベルクがこの教派的多元性と世俗化のプロセスにとくに注目する理由は、19世紀以降——ヘーゲル以降——の神学を含めた思想全般における「人間学への転回」(Die Wendung zur Anthropologie)が、まさにこの18世紀の思想状況へと遡るものであって、パネンベルク自身の神学構想が神学的人間学を方法論的基礎としているからに他ならない(Pannenberg, 1996, 294-367)。(4)

4. 世俗化論：「近代社会において社会と個人の宗教離れはきわめて明確であり、宗教の後退は決定的である。おそらく、遠くからず、宗教は衰退に向かう」。こうした世俗化論は、それに対する反論（たとえば、世俗化は、制度的宗教から別の宗教形態への移行であり、宗教自体の衰退ではない、など）を含めて、1970年代、宗教社会学の分野を中心に世界的にきわめて盛んであった。この研究動向は、日本でも同様である。

井門富二夫『世俗社会の宗教』日本基督教団出版局、1972年。

トーマス・ルックマン『見えない宗教 現代宗教社会学入門』ヨルダン社、1976年。

ブライアン・ウィルソン『現代宗教の変容』ヨルダン社、1979年。

ピーター・L・バーガー『聖なる天蓋 神聖世界の社会学』新曜社、1979年。

D. マーティン『現代宗教のジレンマ 世俗化の社会理論』ヨルダン社、1981年。

ロビン・ギル『神学と社会学の対話』ヨルダン社、1988年。

トーマス・ルックマン『現象学と宗教社会学 続・見えない宗教』ヨルダン社、1989年

5. Robin Gill, *The Myth of the Empty Church*, Society for Promoting Christian Knowledge, 1993.

Where do empty churches come from ? Or, perhaps more accurately, when did British churches and chapels start to appear more empty than full, and why did this happen? (1)

At this heart of this understanding is the notion of secularization. (3)

The gradual effect of some of the leading intellectuals of the nineteenth and early twentieth century --- notably Darwin, Marx and Freud --- has been that religious belief has become increasingly implausible to ever larger sections of the population and that churchgoing has, as the result, slowly atrophied and been replaced by other leisure activities. Empty churches are but the latest visible evidence of this long process of secularization. (4)

secularization is too Euro-centric a notion.

Some even see secularization as a feature of an outmoded 'modernism': for them we now live in a 'post-modern' or post-industrial society. It is possible that 'dechristianization' rather than 'secularization' may more accurately depict religious changes that are currently taking place in British society. (8-9)

it is, I believe, appropriate to regard them as 'myths'. (9)

Cultural secularization is a most unlikely cause of churchgoing decline. (11)

So long as this key myth remains unchallenged, the empty church is not intellectually

S. Ashina

problematic.

Hoever, once this key myth is contested, empty churches do become intellectually problematic.

Once it is no longer acceptable to resort uncritically to a notion of secularization, churches take on a new complexity. The serious scholar is forced to go back to the data and to ask new and unfamiliar questions. Perhaps even a naive question: Where do empty churches come from? (13)

### （3）近代的知と制度的再帰性

6. アンソニー・ギデンス『モダニティと自己アイデンティティ 後期近代における自己と社会』ハーベスト社、2005年。

Anthony Giddens, *Modernity and Self-identity. Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford University Press, 1991.

7. 近代(modernity = a post-traditional order) と制度的再帰性(the institutional reflexivity)

- modern institutions / interconnection between the two 'extremes

globalising influences, personal disposition (1)

- the emergence of new mechanisms of self-identity (2)

- Doubt, a pervasive feature of modern critical reason, permeates into everyday life as well as philosophical consciousness, and forms a general existential dimension of the contemporary social world. Modernity institutionalises the principle of radical doubt and insists that all knowledge takes the form of hypotheses: (3)

- Modernity is a risk culture. (3) Risk assessment invites precision, and even quantification, but by its nature is imperfect. Given the mobile character of modern institutions, coupled to the mutable and frequently controversial nature of abstract systems, most forms of risk assessment, in fact, contain numerous imponderable. (4)

The late modern world --- the world of what I term high modernity --- is apocalyptic, ...,but because it introduces risks which previous generations have not had to face.

nuclear weapon, the risk of massively destructive warfare, ecological catastrophe (4)

- In the post-traditional order of modernity, and against the backdrop of new forms of mediated experience, self-identity becomes a reflexively organised endeavour. The reflexive project of the self, which consists in the sustaining of coherent, yet continuously revised, biographical narratives, takes place in the context of multiple choice as filtered through abstract systems.

the notion of lifestyle, the 'openness' of social life today, the pluralisation of contexts of action and the diversity of 'authorities' (5)

- Modernity, one should not forget, produces *difference*, *exclusion* and *marginalisation*. Holding out the possibility of emancipation, modern institutions at the same time creates mechanisms of suppression, rather than actualisation. (6)

the 'transformation of the intimacy' (6)

an institutional repression, in which --- I shall claim --- mechanisms of shame rather than guilt come to the fore. (8)

Personal meaninglessness --- the feeling that life has nothing worthwhile to offer --- becomes a fundamental psychic problem in circumstance of late modernity. We should understand this phenomenon in terms of a repression of moral questions which day-to-day life poses, but which are denied answers. 'Existential isolation' is not so much a separation of individuals from others as a separation from the moral resources necessary to live a full and satisfying existence.

It is an agenda which demands an encounter with specific moral dilemmas, and forces us to raise existential issues which modernity has institutionally excluded. (9)

- In this book I use the term 'modernity' in a very general sense, to refer to the institutions and modes of behaviour established first of all in post-feudal Europe, but which in the twentieth century increasingly have become world-historical in their impact. (14-15)

'the industrialised world', industrialism is one institutional axis of modernity.

Modernity produces certain distinct social forms, of which the most prominent is the nation-state. ... modern states are reflexively monitored systems which, even if they do not 'act' in the strict sense of the term, follow coordinated policies and plans on a geopolitical scale. (15) ... What distinguishes modern organisations is not so much their size, or their bureaucratic character, as the concentrated reflexive monitoring they both permit and entail. ... the regularised control of social relations across indefinite time-space distances. (16)

- peculiarity dynamic character of modern social life. Three main elements
- the separation of time and space

In pre-modern settings, however, time and space were connected *through* the situatedness of place.

an 'empty' dimension of time (16)

A world that has a universal dating system, and globally standardised time zone

The emptying out of time and space .... it provides the very basis for their recombination in ways that coordinate social activities without necessary reference to the particularities of place. (17)

- the *disembedding* of social institutions
  - symbolic tokens, expert systems → abstract systems
  - money, interchangeable across a plurality of contexts.
  - Money brackets time and space.
  - depend on *trust* (18)

Trust presumes a leap to commitment, a quality of 'faith' which is irreducible.

- the thoroughgoing reflexivity

Modernity's reflexivity refers to the susceptibility of most aspects of social activity, and material relations with nature, to chronic revision in the light of new information or knowledge. Such information or knowledge is not incidental to modern institutions, but constitutive of them, the social sciences play a basic role in the reflexivity of modernity. (20)

the reflexivity of modernity actually undermines the certainty of knowledge, even in the core domains of natural science. Science depends, not on the inductive accumulation of proofs, but on the methodological principle of doubt.

The integral relation between modernity and radical doubt is an issue which... is *existentially troubling* for ordinary individuals. (21)

- tribulations of the self
  - ontological security, anxiety, and the sequestration of experience
  - dilemmas of the self
  - Unification versus fragmentation, Authority versus uncertainty
  - the threat of meaninglessness

Underlying the most thoroughgoing processes of life-planning ... is the looming threat of

S. Ashina

*personal meaningfulness.* (201)

Potentially disturbing existential questions are defused by the controlled nature of day-to-day activities within internally referential systems.

Mastery substitutes for morality; to be able to control one's life circumstances, colonise the future with some degree of success and live within the parameters of internally referential systems can ... allow the social and natural framework of things to seem a secure grounding for life activities. Even therapy... can become a phenomenon of control... (202)

• The return of the repressed

Birth and death are the two main mediating transitions between inorganic and organic life whose wider existential implications are difficult to escape. (203)

We can trace a return of the repressed at the core of sexual behaviour. Passion has become privatised; yet its implications and resonances are far from private. (205)

We may also trace a return of the repressed in a burgeoning preoccupation with the reconstruction of tradition to cope with the changing demands of modern and social conditions. (206)

In this regard it is easy to see why religious fundamentalism has a special appeal. But this is not all. New forms of religion and spirituality represent in a most basic sense a return of the repressed, since they directly address issues of the moral meaning of existence which modern institutions so thoroughly tend to dissolve.

New forms of social movement mark an attempt at a collective reappropriation of institutionally repressed areas of life. Recent religious movements are to be numbered among these, (207)

#### 8. 近代の基本性格としての制度的再帰性（ギデンズ）。

人間存在（精神、自己）の基本構造としての再帰性一般とモダニティの特徴としての制度的再帰性との相違。

#### 9. キルケゴール『死に至る病』（斎藤信治訳、岩波文庫）

「死に至る病とは絶望のことである」（第一編）、「絶望は罪である」（第二編）

「人間とは精神である。精神とは何であるか？ 精神とは自己である。自己とは何であるか？ 自己とは自己自身に関係するところの関係である、すなわち関係ということには関係が自己自身に関係するものになることが含まれている、——それで自己とは単なる関係ではなしに、関係が自己自身に関係するというそのことである。」(20頁)、「関係がそれ自身に対して関係するということになれば、この関係こそは積極的な第三者なのであり、そしてこれが自己なのである。自己自身に関係するところのそのような関係、すなわち自己、は自分で措定したものであるか、それとも他者によって措定されたものであるかいずれかでなければならない」、「かかる派生的に措定された関係がすなわち人間の自己なのである」(21頁)。

↓

自己関係性（自己参照性・再帰性）としての人間・精神・自己  
自己は生成の中においてある。

#### 10. 宗教との関わりで問題な制度的再帰性の特徴

- 懐疑の制度化（確実な知の解体）
- 内部準拠性によるシステムへの繰り込みとシステムの自己修正

↓

- 社会システムの外部の問いの削除、伝統や権威の解体

#### (4) 宗教基盤の変動と再生——イデオロギーとユートピア

11. 19世紀の宗教批判に典型的に見られるように、近代という時代状況において、信仰はイデオロギー（アヘン）かユートピア（幼児性）かの二者択一にさらされることになる。
- ・リクール「世俗化の解釈学——信仰、イデオロギー、ユートピア」、『解釈の革新』（久米博他訳）、白水社。
  - ・芦名定道「ティリッヒのユーロピア論」、『ティリッヒ研究』（現代キリスト教思想研究会）、第3号 73-82頁。
  - ・芦名定道「2 意味世界とユートピア」「3 現代の宗教的状況と終末思想」、『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』（小原克博共著）、世界思想社、14-35頁。
12. しかし、再帰性によって成立するシステムは、その変動（いわゆる限界状況、戦争や革命、そして死）において、外部の問い、システムの根拠づけ・正当化の問いにさらされるという危険（可能性）を除去することはできない。コントロールできないリスクの存在はモダニティへの正当性への問いを提起し続ける。モダニティにおける抑圧されたものの回帰、宗教は衰退しない。
- 安心・予測（未来の植民地化）を目ざしてきた再帰的なコントロール自体が、大きな不安定要因となる。それが生み出す不安な世界という予想外の事態。
- 伝統的宗教は、この不安に対する安心、実存的な確信をなおも与えるのか。
- 伝統的宗教は、根本的な懐疑にさらされているとすれば。
- 伝統的宗教の変革か、新しい形態の宗教の生成か。
13. 近代は再帰的な未完のプロセスであり、近代から、それ以降は生じない（ポスト近代という逆説）。

#### <参考文献>

1. Wolfhart Pannenberg, *Theologie und Philosophie*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1996.  
, *Problemgeschichte der neueren evangelischen Theologie in Deutschland. Von Schleiermacher bis zu Barth und Tillich*, 1997.
2. Charles Taylor, *Varieties of Religion Today. William James Revised*, Harvard University Press, 2002. (『今日の宗教の諸相』岩波書店、2009年。)  
, *A Secular Age*, The Belknap Press of Harvard University Press, 2007.